

2026年5月10日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教81「わたしにつながっていなさい」

イザヤ5：7、ヨハネ15：1～10

信仰は実り、果実を伴います。理想論ではなく極めて現実的なものです。例えばパウロは聖霊の果実として「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」（ガラテヤ2：22～23）を挙げています。信仰によってそういう生き方へとわたしたちは招かれているのです。ただ重要なことは、その実りはわたしたちがスキルを磨いた結果もたらされるものではないということです。その実りをもたらすもの、それはイエスさまであります。イエスさまにつながることによって、それは具体的には洗礼を受けることですが、そのことによって得る恵みが実りとしてわたしたちの生活の中に立ち現れてくるのです。それがいわゆるこの世の成果主義ではないところであり、一般的な倫理、道徳とは根本的に違うところです。

今、NHKの朝のドラマ『風、薫る』をご覧になっている方々も多いと思います。これは大関和（おおぜきちか）という実在の人物をモデルにした物語です。この人は日本のナイチンゲールと呼ばれ、日本の近代看護の生みの親と言われています。ドラマでも教会が出てきますが、実はこの人は熱心なキリスト者で植村正久から洗礼を受けました。ですからわたしたちの教会とも深い関係があります。当時は今のような看護は知られておらず、むしろ病人に携わることで賤業（卑しい職業）と言われていました。そういう時代にあって、病人に寄り添い、看護することは大きな挑戦でした。これを可能にしたのは信仰の力が大いに関係していると思います。単なる人間的な倫理意識がこれを可能にしたのではなく、イエスさまによってもたらされる愛がその源泉にあるのです。

信仰の果実を生み出す源泉はイエスさまです。『ハイデルベルク信仰問答』でも「まことの信仰によってキリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえない」（問64）と告白します。自分を磨いて、切磋琢磨したその先に実りがあるのではない。イエスさまにつながっていれば良いのです。「人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（5節）あなたが自分で努力して実を結べと教えているのではない。イエスさまにつながっていれば、その人は豊かに実を結ぶのです。逆にイエスさまを離れてはわたしたちは何もできないのだということを心に留めたいと思うのです。

ただここで改めて一つ気になることがあります。2節に「わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」とあります。ここではつながっていても実を結ばない枝があると言います。つながっているのに実を結ばないとはどういうことなのか。同じことをカルヴァンが注解書で書いていました。「イエス・キリストに接ぎ木されている人たちが、実りをもたらさないことがあるだろうか。それに答えるため、わたしはこう言おう。人間たちの意見によってぶどう畑に属していると見なされても、ぶどう畑に少しも根をおろしていない多くの人たちがいる。だから、預言者たちに見られるように、神は、外面的な肩書きとしてだけ教会の名を身につけているイスラエルの人たちをも、わたしのぶどうの木と呼んでいることがある」と。つまりカルヴァンは「外面的な肩書き」とあるように、表面上キリスト者であっても中身はまだイエスさまに根をおろしていない。まだ本当にはイエスさまとつながっていない状態があるということを確認しています。これはドキッとする表現です。「自称～」とあります。自分ではキリスト者だと思っている「自称クリスチャン」ということがあるかもしれません。

そういう外面的な肩書きだけにとどまっている。洗礼を受けたけれども、まだしっかりとイエスさまにつながっていない。心はイエスさまから離れている。それを神さまはちゃんと見抜かれている。そしてそういう枝は取り除かれるのです。それがどこでわかるか。

やはり人間というのは、自分の手柄にしてしまうところがあるのです。何か物事がうまく行く。成功する。それは本来イエスさまからもたらされた果実であるのに、まるで自分が努力して得た成果のように考えてしまう。自分を誇る思いが出てくる。そうになると、やはりまだイエスさまに根をおろしきれていないということではないか。まだまだ手前でとどまっているのではないか。そして、そういう実りは偽りの実りであって、本来のぶどうの美味しさにまだ達していないのであります。

今日はイザヤ書の御言葉を読みました。「良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。」(イザヤ5:2)ここを思い起こします。そういうぶどうはどうなるか。「わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれるにまかせ、石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ、わたしはこれを見捨てる」(イザヤ5:5~6)これは神さまの裁きです。わたしたちはそのような神さまの裁きを免れ得ない者であります。しかし、それと並行してこのようにも語られる。「しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」(2~3節)実はここに繰り返されている言葉があります。「手入れをなさる」と訳された言葉はカサロスという言葉ですが、3節の「清くなっている」と同じ言葉です。手入れをすると訳された部分は、他の聖書では「父がきれいに刈り込まれる」と訳しています。要するに剪定するということでしょう。実を結ばない枝を取り除くことは、この手入れと関係しているように思います。枝を剪定して栄養を実に集中させる。農家の人たちはそういう作業をなさると思うのです。

ある人は、この手入れを聖餐と結びつけて解釈されています。ぶどうを植えるのは一度限りですが、手入れは収穫まで何度もするでしょう。ぶどうを植えることを洗礼、そして手入れを聖餐と理解するのです。洗礼はイエスさまとつながることです。でもただつながってもまだまだ根をおろしきれていない。つながっていない。だから豊かに実を結ぶことができるように手入れをする必要があります。そのために繰り返し聖餐にあずかるのです。聖餐にあずかることで、イエスさまとつながっていることを確かめるのです。そうやって人はだんだんイエスさまに根をおろすようになる。それを教会の言葉で「聖化」と申します。この手入れがあつてこそ、良い実を結ぶことができるのです。

わたしたちはどう考えても刈り取られ、投げ捨てられ火に焼かれる枝なのでしょう。けれどもイエスさまがご自身の命を注いで手入れをしてくださいました。刈り取られるわたしたちに代わって、ご自身が十字架で刈り取られてくださった。その裁きを引き受けてくださいました。そして三日目によみがえり、豊かな実りをもたらす命を授けてくださいました。だからまた今日から恵みに応えて生きる生活に励みたいと思います。

天の父よ。本当はあなたにつながりきれていない、それゆえに実を結ぶことができないわたしたちです。けれどもただ恵みによってイエスさまにつながる者とされました。わたしたちの思い、言葉、行いが、あなたの恵みの実りとしてもたらされますように。主の御名によって祈ります。アーメン。